



TITLE:

<追悼>ハンス・アンクム先生の永 逝を悼む

AUTHOR(S):

西村, 重雄

CITATION:

西村, 重雄. <追悼>ハンス・アンクム先生の永逝を悼む. ローマ法雑誌
2020, 1: 188-192

ISSUE DATE:

2020-03-30

URL:

https://doi.org/10.14989/ARK_1_188

RIGHT:

ハンス・アンクム先生の永逝を悼む

西村重雄

2019年6月3日、オランダのローマ法学者として国際的にも名高いハンス・アンクム教授は、アムステルダムにおいて永逝された。われわれも、大変残念な知らせとして受け取らざるを得ない。

Hans (Johan Albert) Ankum 教授（以下先生と記す）は 1930 年 7 月 23 日にお生まれになり、アムステルダム近郊 Koog aan de Zaan 町長の父、フランス語教員の母のもとで育てられた。アムステルダム大学法学部に 1948 年入学し、私法学者 M.H. Bregstein 教授、ローマ法学者 H.R. Hoetink 教授の薫陶を受けて優秀な成績で卒業後、オランダ政府留学生としてパリに 2 年間留学され、帰国後母校の助手、ライデン大学講師を経て、1965 年 Hoetink 教授の講座後継者となり、1995 年定年退職まで、研究教育に尽力された。その間、多くの弟子を養成され（その中には、A.Hartkamp [近時のオランダ民法改正を主導]、E. Pool, L. W. Winkel などが含まれる）、また、管理職（任期各 1 年）として、法学部長、副学長をそれぞれ 2 回勤められた。退職後も、精力的に内外の学会等で活動をされた。その学識は国際的に高く評価された。オランダ学士院会員に 1986 年に選ばれ、また、名誉博士号が 1986 年ブルッセル自由大学を始めとしてあわせて 8 つに上る大学から、授与されている。

わが国との関係では、東京大学法学部片岡輝夫教授との交渉が早くからあったと先生から承った。それもあって、日本学術振興会の招請により 1983 年 3 月に来日され、各地で講演された（その一つ「パピニアース、意味不明な法律家か」は小川浩三氏の労により

北大法学 44 巻 2 号 221－265 に訳出)。その後、福岡で 1991 年秋開催の委任をテーマとする国際ローマ法シンポジウムを D.ネル教授（ミュンヘン大学）と細かな打ち合わせで組織運営に尽力された（その報告 *Der Verkaeufuer als cognitor und als procurator in rem suam im roemischen Eviktionsprozess der klassischen Zeit, in Mandatum und Verwandtes* ed. D.Noerr, Sh.Nishimura, Berlin 1993 285-306; ご自身も勉強になったと重ねて伺った）。1996 年 3 回目の来日は、日本学術振興会とオランダ科学機構との研究者交流協定改定交渉のためであり、この改定により文系研究者にも門戸が開かれることになった。（滞在中の講演「事務管理における「有益性」要件：そのローマ法的沿革」は上村一則氏の労により法政研究 62 巻 3－4 号に訳出）。

先生の研究の出発点は、プーブリキウス訴権のローマ法以来近世を経て 19 世紀までの長い歴史の研究である。学位論文として、最高の *cum laude* の評価をうけ、2 冊の書物（J. A. Ankum, *De geschiedenis der actio Pauliana*, Zwolle 1962, 491 p. with a summary in French. および J.A. Ankum, *De Pauliana buiten faillissement in het Nederlands recht sedert de codificatie*, Zwolle 1962, 246 p with a summary in French.）として刊行された。その後、古典期ローマ私法を主として研究をすすめられた。65 歳の記念論文集 R. Feenstra, A. S. Hartkamp, J. E. Spruit, P. J. Sijpesteijn, L.C. Winkel (edd.) *Collatio ivris romani – Etudes dédiées à Hans Ankum à l'occasion de son 65^e anniversaire*, J. C. Gieben, Amsterdam 1995, I-II, 710 p. 第 1 巻冒頭著作目録には（書評、追悼文などもふくめ）234 編、論文集 Hans Ankum, *Extravagantes – Scritti sparsi sul diritto romano* (a cura di Carla Masi Doria e Johannes Emil Spruit), Antiqua 93, E. Jovene, Napoli 2007, 531 p. 末尾に以降同年までの追加著作目録、さらにまた、スペインのウルシチーノ・アルバレス賞による論文集; Hans Ankum, *Nueva*

antología Romanística, Marcial Pons, Madrid etc. 2014, 430 p. 末尾著作目録には 327 編が挙げられている。

先生が本格的に古典期ローマ私法への取り組みを始められたころには、約百年続いた修正研究に大きな転換が到来した時期であり、また、その師 Hoetink 教授が修正研究に慎重であったことも幸いした。先生は、それ迄の修正研究で生じた古典期ローマ法研究のゆがみを戻し、古典法文を尊重しつつ議論しようとするローマ法学界の動向の代表者の一人としての役割を担うこととなった。その中で、古典期法学者が、決してサビニーの形容したような「代替的人物」ではなく、それぞれ個性ある人物であることを具体的に明らかにされた。

また、実定法（民法）との関連を十分に意識しながらの議論を展開されることもその特徴のひとつかもしれない。（学会での休憩の時間に、「ローマ法は同じもので国際的にも同じものであるはずなのに、各国の研究者ごとに、それぞれの民法を背景にこれほど違った観点から解釈されているんだよ」と漏らされたことがあった。）

先生は、オランダの風土もあろうか、権威主義には縁遠かった。法文資料に即して、公平な様々な議論をすることが大事と常々強調され、その様々な解釈の可能性を容認して、若い研究者の意見にも熱心に耳を傾けられた。アムステルダム大学での演習で参加の助手、大学院生、学生との議論からご自身も大いに学ばれたものがあるようである。そして、ご自身も、熱心に新しい文献には目を通された。ローマでの先生の「定宿」G. Crifo 邸で同宿を許されたある夕は、慣例の、イタリア新文献の熱心なメモの様子を横で拝見することと

なった。「頭のとっぺんから足のつま先までローマ法・法制史」と言われた先生ならではの姿である。

また、そのお人柄と豊富な語学力を生かされ、各国のローマ法研究者達と親密な関係を結ばれ、さらにはその国では不遇な方には特に励ましの言葉を掛けるなど国際的にも指導者として、若手の育成に心を注がれた。東欧などの文献の不足する研究者にはご自身で複写・送付の労を厭われなかった。先生に勇気づけられた研究者は私を含めずいぶん多い。

先生の学会活動については、古代法史国際協会（SIHDA－1985年ストックホルム・ウプサラ大会以前は SIDA）を抜きにしては語れない。また、この学会開催はそれだけ先生のご尽力に負うところが多い。長年、盟友であるベルギーの古代(エジプト)法史学者 Aristide Theodoridès と協力し、またその没年(1994年)後は一人で非公式に手紙・電話であるいはワインを飲みながら、開催引き受けを説得ないし運営の助言をされていた様子である。

学会では、興味ある報告を、いつも最前列に近いところで、「(自分は学説彙纂を全部頭に入れているわけではない)との「弁解」をしつつ)学説彙纂小型版と FIRA を持参して傾聴され、的確な質問をしばしばされたことは、学会参加者の多くが目にしたところである。

学会の懇親会終了後も、(自宅での日課とおなじく)自室で午前2時までは仕事の習慣であった。オックスフォードでの1993年大会のある部会でのある報告の最中のこと、聞き手の多く(小生もふくめ)は、半ば居眠りしていたところ、壇上の大きな音に目を見開

くと、先生の巨体が司会者の椅子からすっきり滑落ちてしまっているのを目撃することになった。司会中の居眠りは先生の常例であったが、報告の核心は不思議なことにちゃんと把握しておられるのである。

しかし、寄る年波には先生も勝てず、ご自身の病気とそれに由来する不運な出来事を押して、2018年9月ポーランド・クラクフ大学で開催の大会に出席報告されたが、昔日の精彩を欠き、いささか案じられた。2022年1月のチリで開催予定の学会について、「(新天地を見出した旧蔵書にも) 再見を兼ねて参加できれば」、というご希望は叶わぬことになった。(若き日にはそれで身を立てることも考えられたという) 音楽の鑑賞をほとんど唯一の趣味とされていたから、コンサートへボウで演奏会を聞かれた次の日に亡くなったというのは、先生らしい最後と思えるかもしれない。

謹んで先生のご冥福を祈念する。 合掌

なお、本稿作成にあたり、(小生の見聞を超えるところは) 上記の記念論文集、2冊の精選論文集の献呈、序文等および、愛弟子 L.Winkel ロッテルダム大学教授の英国エジンバラ大学での 2019 年国際古代法史協会大会での追悼演説(そのご厚意により送付をうけた英文版)を参考にした。また、先生との生立ち経歴につき C. H. van Rhee & L. C. Winkel, Een Romeinsrechtelijke coryfee – Rechtshistorici in de Lage Landen (11): Interview met Hans Ankum, in: *Pro Memorie* 12 (2) (2011), 146–168.が参考になるものと思われるが、残念ながら未読。

(完)